正史を彷徨う

エピローグ

森隆一

エピローグ

‘正史を彷徨う’を大雑把に振り返ってみよう。

後漢書・三国志韓条を見ているうちに **其北與樂浪 南與倭接** と書かれていた。また、倭条には **倭在韓東南大海中** と書かれている。三国志魏書でも **韓在帶方之南 東西以海爲限 南與倭接、倭人在帶方東南大海之中** と位置に関してはほぼ同じ内容となっている。

これから、後漢書の時代には倭は朝鮮半島にあった。三国志の時代には、初めは朝鮮半島にあったが、その後、日本列島に移った。ここで、倭女王が居住する邪馬台国の位置が確認できなかったのが、倭人条となったのではないかと考えた。今思うと、倭と倭人についてはもう少し考察が必要と考える。

倭の移住の原因としては、鉄資源の枯渇ではないかと考えている。この朝鮮半島から日本列島への移住に始まり、奈良県に落ち着くまでを倭の東遷とよぶことにした。

また、後漢書には **使驛通于漢者三十許國 國皆稱王 世世傳統其大倭王居邪馬臺國** という記事があった。

この記事からは、倭国は(部族)国家連合で、大倭王は邪馬臺國に居住する。さらに、大倭王が居住するところが邪馬臺国と考えた。これ

には、朝鮮における邪馬臺国を特定することが必要であるが、漠然と、加耶地方と思っている程度である。

神功皇后紀では **卅九年 是年也 太歳己未 魏志云 明帝景初三年 239 六月 倭女王遣大夫難斗米等 詣郡 求詣天子朝獻 太守鄧夏遣吏將送詣京都也** という三国志魏書倭人伝の記事を引用している(言及している)のが目についた。

まずは、この記事が書かれている意図が不明である。国内的には、倭人伝を読むことのできる人は限られていると思われ、殆ど意味がないであろう。とすれば、対外的に倭王の後継者を主張するものかもしれない。ここで、“神功皇后 39 年は景初 3 年で西暦 239 年である”を年代の基準とした。

三国志では、卑弥呼の死後男王を経て宗女の壹与が倭王となったと記されている。後の宋(梁)書では女王の名前が臺与となっている。これに関しては論争があったが、結果は把握していない。女王の存在さえ変更が無ければ、名前などは大勢に影響しないということだろうか。豊・伊予は古代からの地名である。これから、卑弥呼の後、壱与・壹与あるいは壹与・壱与の 2 人の女王がいたとするのも面白いと

も考えた。

晋書では、**文帝作相** 263 **又數至、泰始初** 265 **遣使重譯入貢** の後 **義熙九年** 413 **高句麗 倭國及西南夷銅頭大師並獻方物** までの 157 年間倭の朝貢の記事はない。かわって、東夷〇〇国の記事が書かれている。なお、帯方郡が滅びたのは 313 年である。

倭が国家連合であったことと日本列島に移住したことからは、大倭王になりえる部族が日本列島に移住し、移住先の経営にあたり、朝鮮半島に関与する余裕がなかったことと、残った部族には統率するような部族がいなかったのではなかったかと考えている。

三国志の‘女王国への行程’には倭の地名と官名が書かれている。ここに女王国の支配地域が書かれていて、大雑把に言えば、佐賀県と福岡県の玄界灘沿岸地域で、筑後川流域への侵攻中であり、次の目標は、菊池川・大野川流域(福岡県南部・大分県南部)であろう。この地域は鉱物資源に恵まれた地域である。この時期では国東を‘くにさき’と呼ぶにふさわしいのではないか。

ここまでで九州北部を支配下においたことになる。これだけの地域を支配すれば、他を圧倒する、あるいは、2 面作戦も可能な兵力に

なったはずである。

次の侵攻先としては、肥後・日向、伊予、周防の3方面である。また、朝鮮半島の故地でも、百済や新羅の建国と膨張に対応することも考えられる。さらには、高句麗の強大化もある。

この辺りが、宋書・南斉書・梁書に書かれている倭の五王の時代の始まりと考える。上の王朝は全て南朝の王朝で、北朝の王朝には朝貢の記事はない。倭の記事もない王朝もある。

上のことが日本書紀から読み取れるかが本稿の目標である。

神武天皇紀に書かれている東遷(神武東遷)はダイジェストと考えている。古代において、1代で九州から近畿かで征服するのは難しいとが、時系列としてはおかしくないと考える。

景行天皇紀には、景行天皇の事績として中九州、日本武尊の事蹟として熊襲討伐と東征が書かれている。神功皇后を卑弥呼とすれば、時系列が逆になっている。また、真名野長者伝説2に書かれている般若姫上洛の話は、九州と周防・伊予が舞台となっている。さらには、「IRON ROAD ・和鉄の道」では、菊池川・大野川流域の製鉄関連遺跡が扱われている。

もう1つ‘加上説’というものがある。これは、新しい事蹟を、古

い時代に置き、古くから行われているようにする手法で、‘加上法’というべきである。加上法が用いられるとして得られる主張を加上説ということになる。

これらから、九州北部の事蹟は景行天皇紀に書かれた。このとき、周防(・伊予)の話を、記紀編纂時の東征の地に移したと考える。

東遷のダイジェストとした神武天皇紀に現れる地名のうち、大和盆地を除くものを挙げてみる。

速吸之門(45 歳 10 月)→筑紫国 菟狹→筑紫國崗水門(11 月)

→安藝國 埃宮(12 月) →吉備國 高嶋宮(3 月) 三年間

→難波之碕(浪速國、49 歳 2 月)

→河内國草香邑青雲白肩之津(3 月)

→龍田(4 月)→茅淳山城水門(5 月)→名草邑(6 月)

→(兄猾及弟猾)菟田縣(49 歳 8 月) →菟田高倉山之巓(9 月)

→擊八十梟帥於國見丘破斬之(10 月)→・・・

→東征終了宣言(50 歳 3 月)

納媛蹈■五十鈴媛命 以爲正妃(51 歳 9 月)

天皇即帝位於橿原宮 是歳爲天皇元年(52 歳 1 月)

立皇子神渟名川耳尊爲皇太子(32 年 1 月)

天皇崩于橿原宮(76 年 3 月)

神武天皇陵など畝傍山周辺は、藤原京造営時にその時の王朝(藤原王朝)により祀られたのではないか。また、他の漢風諡号に神の付く天皇、崇神天皇と応神天皇、も同様のことが言えるのではないかと考えた。

漢風諡号	和風諡号	諱
神武天皇	神日本磐余彦天皇	彦火火出見
崇神天皇	御間城入彦五十瓊殖天皇	御間城尊
応神天皇	譽田天皇	

神武東征では、かなりの期間吉備に滞在している。この時期の吉備は播磨を含んでいたようである。吉備滞在とそれ以外の期間を取り出すと、45 歳 10 月に出発し、46 歳 3 月に吉備に居到着し、49 歳 2 月難波之碕に到達し、50 歳 3 月に東征終了宣言が為された。4 年半の間 3 年である。

吉備から近畿に移ったことが書かれている天皇は、顕宗天皇と仁賢天皇のみであり、これ以外に、近畿に外からうつったのは継体天皇である。

吉備から近畿への進路としては山陽道、中国道、南海道が考えられ、さらに、山陽道は陸路と海路が考えられ、南海道は淡路島から和泉に向かうのと南下して和歌山向かうものが考えられる。

これらの痕跡が日本書紀に残されていないかを探ることを試みたが、今のところ成果はあがっていない。このまま続けるかどうか迷ったが、結局打ち切ることにした。

新稿の準備の予備として、縄文海進を調べているうちに、地理院地図で‘自分で作る色別標高図’というアプリを見つけた。ここで試行的に作成した図の幾つかを掲げる。

まずは、大和盆地の地勢図である。色分けは異なるが、図 11.5 奈良湖と殆ど同じ図である。

新稿に向けて今思っていることを挙げることにする。まずは、Flood Maps を地理院地図色：別標高図で置き換えることである。

- Flood Maps と地理院地図を色別標高図に置き換える。

陵や宮などの地名を書き込むことから何かが得られると期待している。河内湖と奈良湖には特に期待している。このためには、適切な

区切り値の設定が必要であるが、今は試行錯誤の状況である。

Flood Maps では海水面でしか色分けできなったが色別標高図では任意の値で７色に色分けできる。

ここでは、試しに作成した色別標高図の幾つかを示すことにする。なお ‘(　)’ 内に‘正史を彷徨う’での対応する図の番号とタイトルを付した。

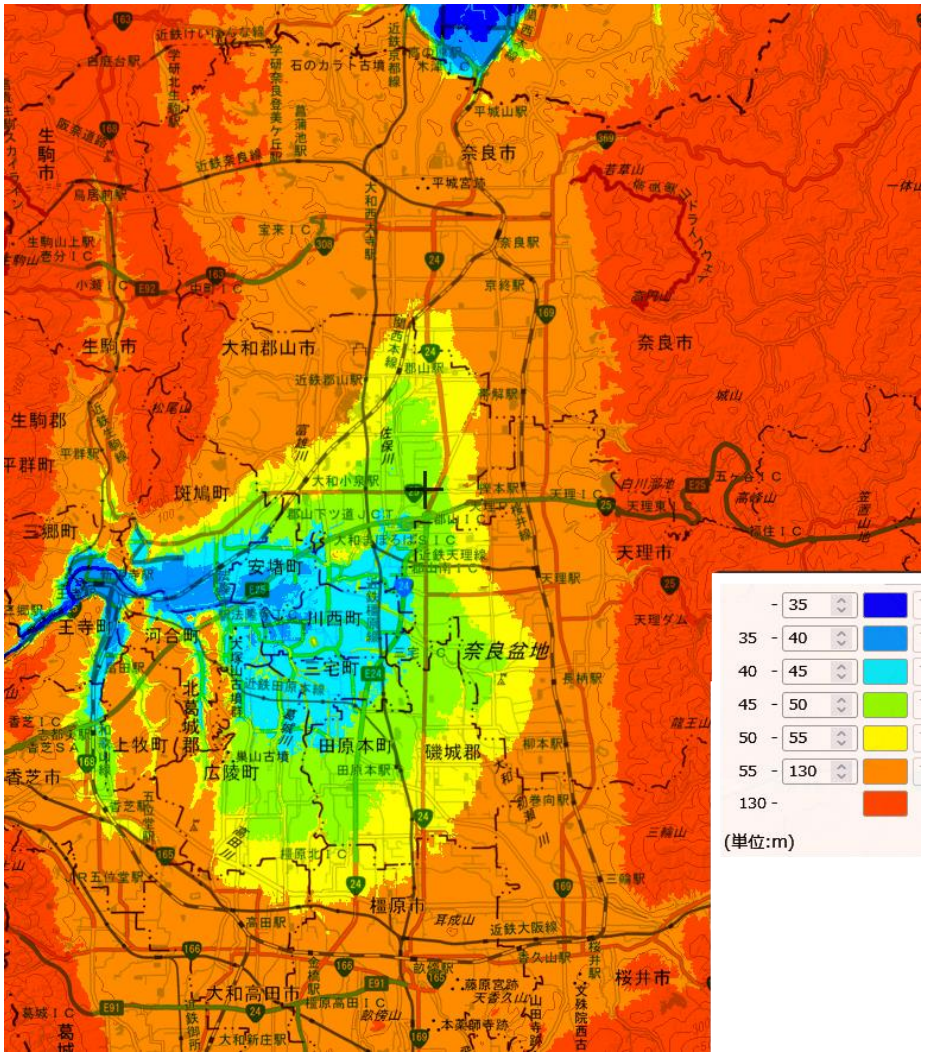

図 A.1. 奈良湖の色別標高図 （図 11.5 奈良湖）

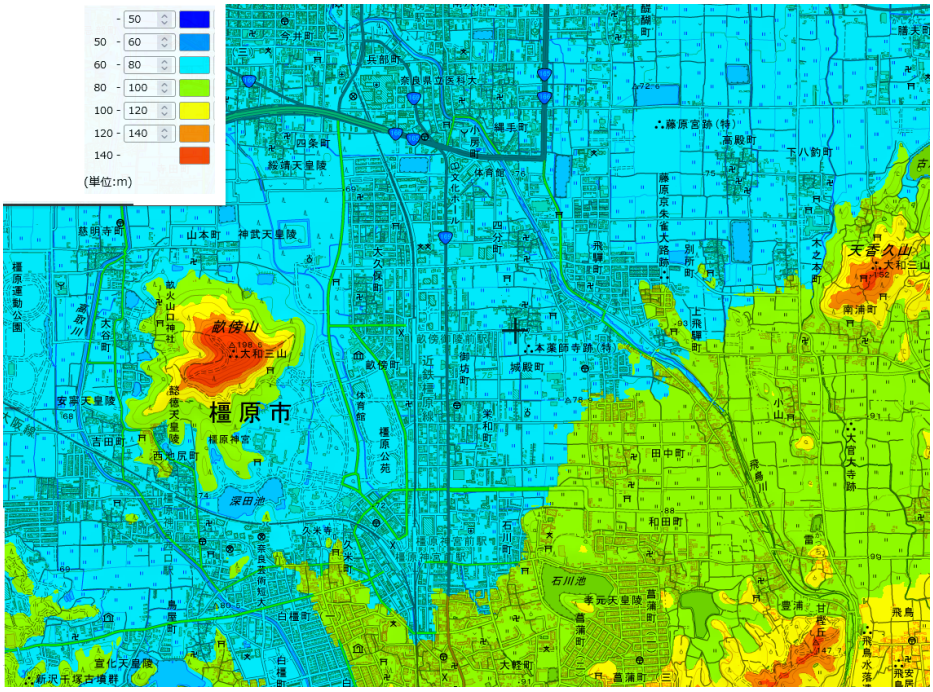

図 A.2. 飛鳥・藤原京周辺の色別標高図 （図 23.3）

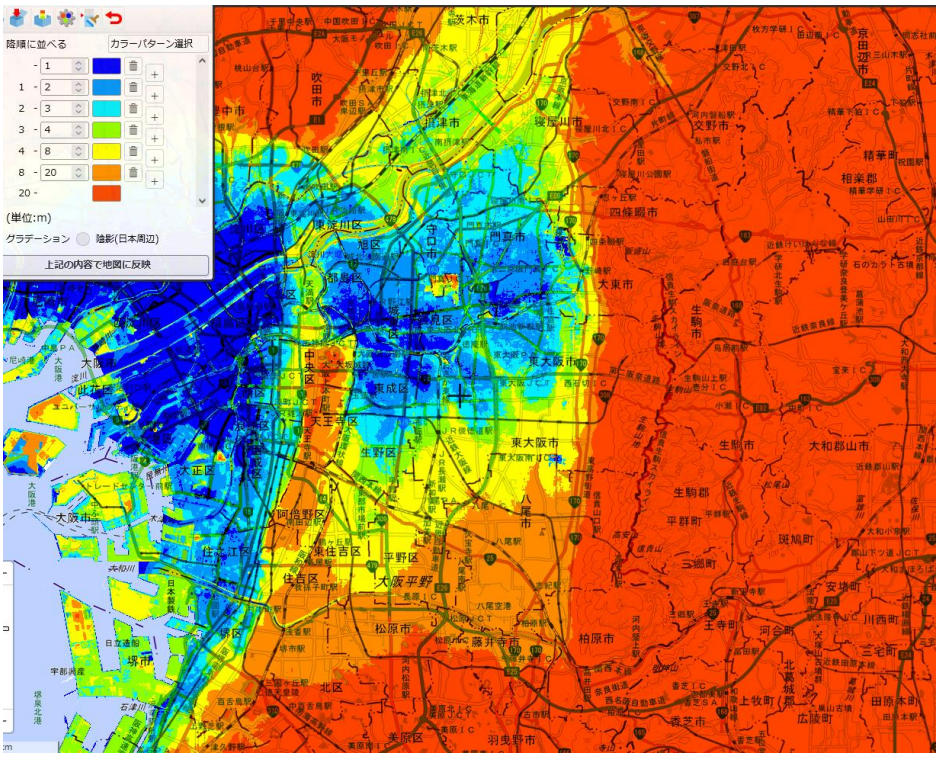

図 A.3. 河内湖の色別標高図 （図 11.3 河内湖）

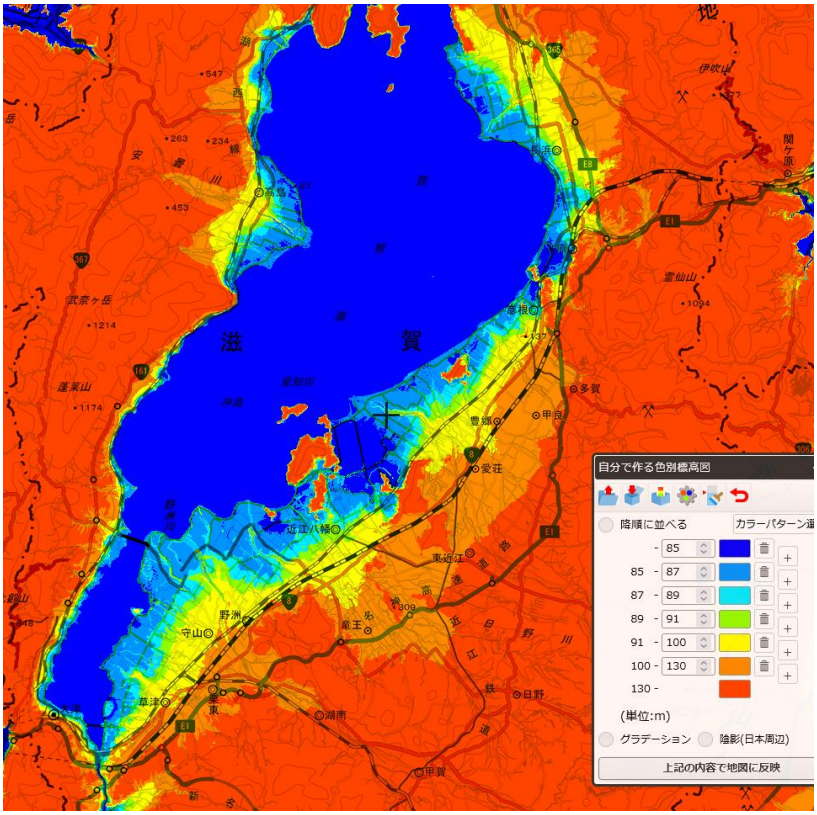

図 A.4. 琵琶湖の色別標高図

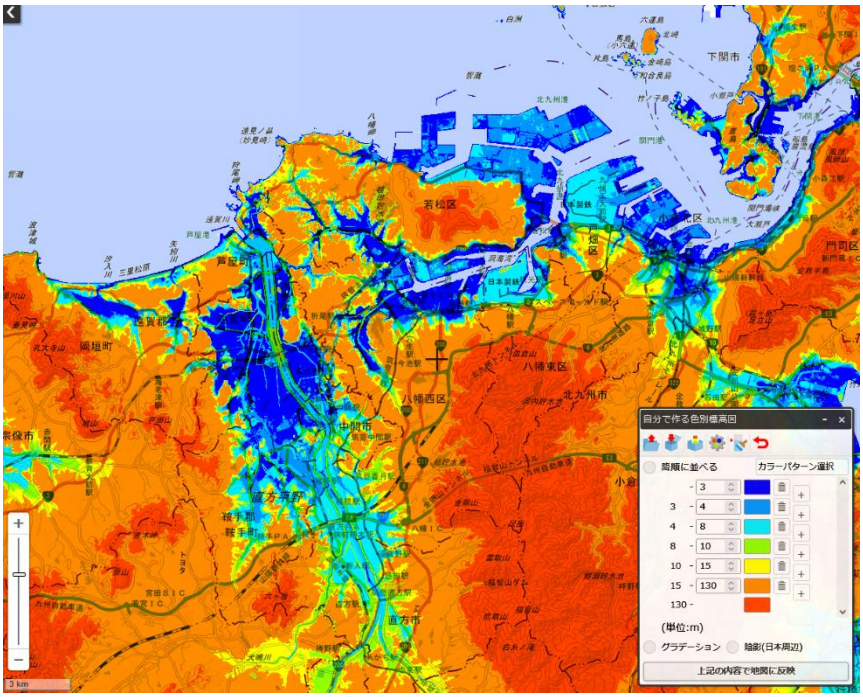

図 A.5. 筑紫湖の色別標高図 （図 18.11 Flood Maps 筑紫湖）

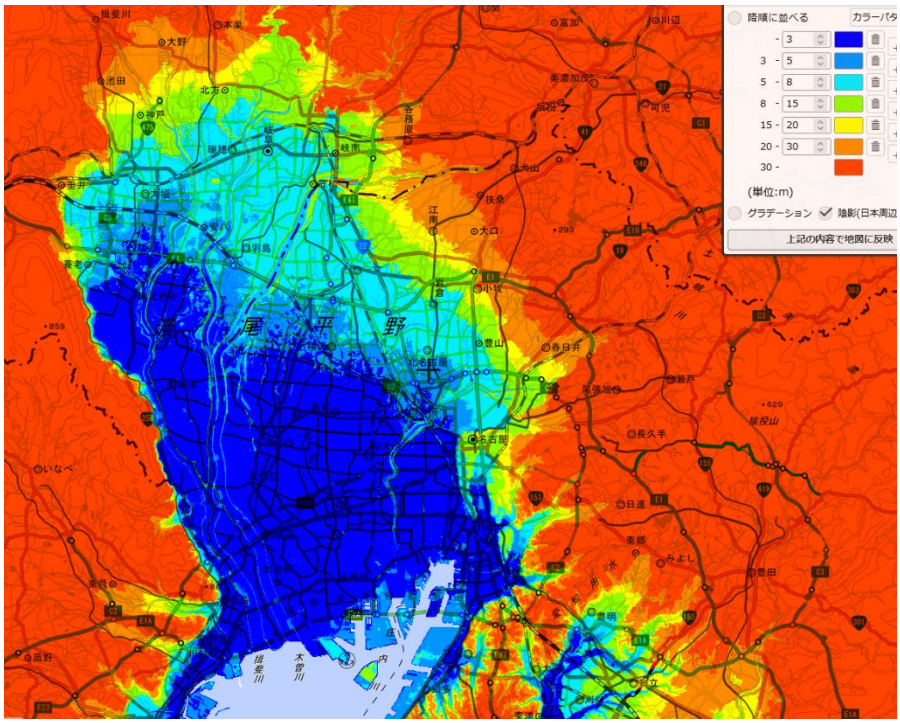

図 A.6. 伊勢湾の色別標高図 （図 12.8 Flood Maps 伊勢湾）

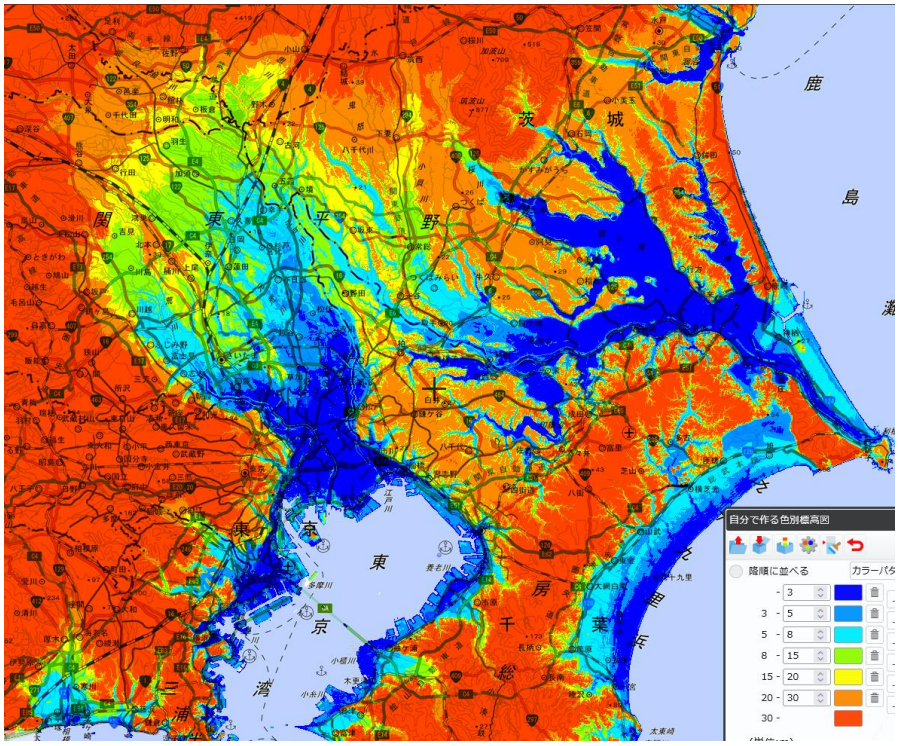

図 A.7. 関東の色別標高図 （図 12.12 Flood Maps 関東）

他に思っていることを挙げていく。

- 縄文弥生を検討する。

  特に、縄文海進。大陸地図レヴェルで変らないのは、ギリシャ・トルコ・日本など平野部の乏しい所。

- 神武天皇紀を除く、各天皇紀に、后妃とその皇子皇女と諸表の関連記事を加える。皇子皇女の尊称を考察。
- 三国史記をどの程度取り入れるか。
- 倭鉄の道をどうするか。
- 作業仮説を整理する。
- 摂政と悲運の皇族の考察
- 中国の王朝への遣使の時期と回数を調べてみる。
- 遣隋使の記事の検討

新稿は‘正史を訪れる’とするつもりである。構成は‘正史を彷徨う’を踏襲することとし、内容の整理再配置と一部の充実から手を付けていく予定である。

最後に、‘正史を彷徨う’を書くきっかけとなった‘真名野長者伝説2’を紹介しておく。テキストは次のもので、これから細かいと思部分を削除した。もう一つ`和鉄の道’も纏めたかったが、こちらは出来なかった。引用元は次である。

雑学の世界＞口説＞炭焼き小五郎＞

炭焼小五郎伝説・炭焼小五郎口説き・真名野長者伝説1・真名野長者伝説2・般若姫伝説・類似伝説伝承・・・

炭焼小五郎(真名野長者)は継体天皇三年509豊後玉田で生まれた。都のある大臣の娘の玉津姫は、三輪明神のお告げにより、豊後にいき、小五郎と夫婦になった。継体天皇二十五年三月十五日531のことである。このとき、黄金を見つけ大金持ちになった。この噂を聞いて、港に百済の船がやってくるようになり、小五郎は沢山の宝物や珍しい品物を買い求めて、ますます富み栄えた。

欽明天皇十年五月八日549玉津姫は般若姫を安産した。翌年、百済の国から船頭竜伯というものが来て、黄金の鋳仏一寸八分の千手観音を奉持した。姫が十一才の時の四月、唐土の都から大王の使者が、船頭竜伯の案内で画工細工の名人、夷管、褒薩の兄弟を召連れて長者のところに来た。

欽明天皇は皇子のお妃として、姫を都に差上げるよう、武人安藤隼人正を勅使として豊後に差向けられた。隼人正の進言により、娘の代りに玉絵箱を献上

することにした。帝は「勅宣にそむいて姫を差上げぬことは不都合である。違勅を見のがすことはできぬが、まず難題を申しつけて、それに少しでも違背したならば直ちに押えて姫を取りあげよ」ということで申し渡された三つの難題をクリアした。このとき、大伴持主、伊利の大臣が勅使になった。

欽明天皇第四の若宮、橘の豊日の皇子は修業者に変装して、秘かに内裏を忍び出られ、まず、都近くの三輪明神にお参りして深く祈願ののち、夜を日についで下向し豊後の国に下った。そこで身分を伏せ、御名を山路(さんろ)と改め土地の人に紛れ込み、長者の屋敷を探した。この後、流鏑馬の矢によって地神のたたりを鎮めた山路の知勇兼備の立派な若武者ぶりに、長者一家の喜びは限りなく早速、婿と決めた。

勅使が到着して若宮は帰洛した。般若姫は十一月八日、月満ちて、めでたく女の子を安産され、玉絵姫と名づけられた。

欽明天皇二十八年 567、般若姫は大船小船合せて百二十隻に分乗して、臼杵の浦から三月十三日、順風を得て舳艫(じくろ＝船首と船尾)相含んで出帆した。姫の船が豊後(国東半島)深江の浦に入って碇舶している所に、勅使、伊利の大臣が上下百人三隻の船で入港してきた。「御上洛が余り長引きますので、主上をはじめ若宮様は大変お待ちかねでございます。お迎えにまいりました」と宣旨を伝えた。

周防の国、平郡島にさしかかった時、にわかに大風が起こって、姫の船は周

防の国、熊毛の浦に吹き流されてしまった。この熊毛に十日ほど滞在し、この間、向うに見える小島に渡って、馴子舞の祝儀を行ったが、この島は豊後の姫島であると言い伝えられている。三月二十九日には、この島を出帆したが、周防国大畠鳴門の瀬戸にかかった時、またまた暴風が起り、百二十隻の船は十方に吹き流されてしまった。翌日は天気晴朗となった。ちりぢりになった船も集まってきた。そこで陸に上陸すると暑くなった。姫が「暑い」と言ったので、この地を阿月の浦という。そこで村人が冷たい清水の湧く井戸の水を姫に差し上げたので姫は、お礼に楊とん山の楊枝を井水の傍らに差した。すると一夜のうちに芽が出て柳の木になったので、ここを柳井と呼ぶようになった。

この後、「このたび、あまたの家人がここの海の藻屑と消えた。このような哀愁にあってまでも、自分は皇后になろうとは思わない」と、おおせになると、そのまま海に身を投げてしまわれた。それを見た三人の侍女も、そのあとを追って投身したのが、船には水練に達した百済の船人がたくさん居たので、四人は救い上げられた。しかし、姫は数日の絶食で、いままた海に投じたので心気次第に衰え良薬も看護もその甲斐なく、いよいよ最後の時が迫った。

それから、溝部、萩原、竹内、柿本原、竹田、臼杵、石上の七人が上洛し、遺品を献上して、「私どもは姫を守護して上洛しましたが海上数度の難風にあい、ついに、お疲れのために名医の術も甲斐なく薨去せられました」と謹んで奏上すると、帝をはじめ大いに御愁嘆になったが、わけても若宮の御嘆きはま

た格別であった。帝は、「不憫なる姫の次第、この上は悔いなきことと贈官を下す」と、お仰せられて「般若皇太后宮」という御諡を御下しになった。

数年後、萩原次郎右衛門。同但し左衛門の両人は長者の意を受け上洛し、「橘の豊日の皇子の姫君、王絵姫は、次第に御成長遊ばしましたが、都へお召し上げになりましょうか。お伺い申しあげます」と言上すると、「かねて皇子と約束がある、と聞くから、姫は長者に賜う」と、お仰せ下された。両人は非常に喜び、重ねて、「この上ながらのお願いは、内裏より長者の世継ぎを賜わりますよう」と、お願い申しあげると、もっともな願いということで、伊利の大臣の三男、当年十三才になる金政公を長者の世継ぎとして、お選びになった。両人は大喜びで金政公のお供をして帰国したので、長者夫婦はもとより、家人に至るまで家の安泰を喜び合った。

その後、敏達天皇元年 572 天皇は御即位の御祝儀として、金政公に五千八百代の田地を与え、綸旨を添えられ、隼人正を勅使として豊後の国にお差し向けになった。その綸旨は、かつて豊日の皇子が長者の牛飼いとなり、草刈りをされたことに因み、金政公の御姓名を草刈右衛門助と号し、「橘の氏次と名乗れ」という勅定であった。

敏達天皇六年 577 の三月上旬、守屋大臣は、一門貴族を集めて、「豊後の国に真名野長者というものが居るが、外よりさまざまの沙門を招き、天台山から仏像という異形のものを取り寄せ、天竺の仏院とやらを我が国に移し奢りを極め

るということは、その罪がはなはだ大きい。もとよりわが国は神国であって、異国の邪教を入れるということはよろしくない。そのようなことをすれば神の怒りによって世に災難が起るであろう。このままにさしおくことはできぬから、急ぎ押し寄せ寺院を焼き払い、長者父子を残らずからめとれ」と命じた。

戦さが終わり平穏になったので、長者は般若姫の供養をしたいと、船に乗り瀬戸内海を巡って姫の足跡を辿り、周防、魚の庄(伊保庄・山口県平生町)に至って般若寺を建立した。さらに船を進めると、嵐にあって予州高浜(愛媛県松山市高浜)に吹き流されたが、危ういところで観音の光に助けられ、ようやく帰郷することができた。それでお礼に高浜に太山寺を建立した。こうして航海を終えたが、それでも姫を失った長者夫妻の嘆きは、なかなか収まらなかった。

やがて、一人娘を失った真名野長者、小五郎は、現世の楽しみも尽き、身は老境に入ったので、蓮城法師からかねがね聞いていた天竺にあるという祇園精舎の姿を、人の命は限りあるもの、できることなら、この豊後の地に移し、仏縁を後世に残したいと考えるようになった。そこで長者は石に仏の姿を彫り上げることを発願した。その場所は満月寺周辺の岩場が選ばれた。